

埋蔵文化財調査報告書 5

—平成 23・24 年度 国庫補助事業 市内遺跡調査報告書—

小板井屋敷遺跡4
横隈上内畑遺跡7
小郡大原町遺跡

小郡市文化財調査報告書 第 269 集

2013

小郡市教育委員会

序

小郡市は、北部の宅地開発や北東部、中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、これに伴う交通網の整備、更なる宅地の開発なども進行しており、福岡市、久留米市のベッドタウンとして今なお発展を続けています。

今回報告する『埋蔵文化財調査報告書5』は、小郡市教育委員会が平成23年度に実施した「小板井屋敷遺跡4」「横隈上内畑遺跡7」「小郡大原町遺跡」の埋蔵文化財発掘調査の成果です。小郡市とその周辺地域の歴史を知るうえで貴重な資料となり得るもので、新しい歴史資料として活用いただけることを願っております。

最後になりましたが、調査に多大なるご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地での発掘作業にあたった地元作業員の皆様、発掘調査を進めていくうえでお世話になった多くの方々に深く感謝を申し上げます。今後とも埋蔵文化財行政に対するご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

平成25年3月22日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は平成23年度国庫補助事業として、小郡市教育委員会が実施した小板井屋敷遺跡4・横隈上内畑遺跡7・小郡大原町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載する遺構の実測は調査担当者他、柏原孝俊・姫野久恵・宮崎美穂子（以上、小板井屋敷遺跡4）、久住愛子（小郡大原町遺跡）が行い、製図は久住が行った。
3. 本書に掲載する遺物の実測は、白木千里（小板井屋敷遺跡4・横隈上内畑遺跡7）、能孝明（横隈上内畑遺跡7）、上田恵（小郡大原町遺跡）が行い、製図は白木が行った。
4. 本書に掲載する遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。
5. 掲載図面の方位はいずれも座標北を示している。
6. 本書において使用している遺構略号は下記のとおりである。
住居；SC 溝；SD 井戸；SE 土坑；SK ビット；SP
7. 挿入中に示している数字は本文中の各遺物番号と一致する。
8. 本書に掲載する遺構図、遺物及び実測図、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
9. 本書は第1章及び小板井屋敷遺跡4・小郡大原町遺跡を上田、第2章及び横隈上内畑遺跡7を龍が執筆し、上田が編集を行った。

本文目次

序 凡例

第1章 調査の経過と経緯	1
【小坂井屋敷遺跡4】	
【横隈上内畑遺跡7】	
【小郡大原町遺跡】	
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の成果	6
(1) 小坂井屋敷遺跡4	6
【調査の概要】	6
【遺構と遺物】	6
1. 住居	
2. 土坑	
3. その他の遺構	
【小結】	12
(2) 横隈上内畑遺跡7	14
【調査の概要】	14
【遺構と遺物】	14
1. 井戸	
2. 土坑	
3. 溝	
4. その他の遺構と遺物	
【小結】	19
(3) 小郡大原町遺跡	21
【調査の概要】	21
【遺構と遺物】	21
1. 溝	
2. 水路	
【小結】	23
抄録 奥付	

挿図目次

第1図 調査地点位置図 (S=1/5,000) ……………	1	第13図 1号井戸実測図 (S=1/40) ……………	14
第2図 小郡市内遺跡分布図 (S=1/50,000) ……	3	第14図 2号井戸実測図 (S=1/40) ……………	14
【小坂井屋敷遺跡4】			
第3図 小坂井屋敷遺跡4 遺構配置図 (S=1/50)…	5	第15図 3号井戸実測図 (S=1/40) ……………	15
第4図 1号住居平・断面図 (S=1/40) ……………	6	第16図 1～3号井戸出土土器実測図 (S=1/4) ……	16
第5図 2号住居及びびかマド平・断面図 (S=1/20・1/40) ……………	7	第17図 1号土坑実測図 (S=1/40) ……………	17
第6図 1・2号住居出土遺物 (S=1/4) ……………	8	第18図 6号土坑実測図 (S=1/40) ……………	17
第7図 3号住居平・断面図 (S=1/40) ……………	9	第19図 1号土坑出土土器実測図 (S=1/4) ……	17
第8図 3号住居出土遺物 (S=1/4) ……………	9	第20図 1号ピット実測図 (S=1/10) ……………	18
第9図 1～5号土坑平・断面図 (S=1/40) ……	11	第21図 1号ピット出土土器実測図 (S=1/4) ……	18
第10図 土坑出土遺物 (S=1/4) ……………	12	第22図 遺構検出時出土土器実測図 (S=1/4) ……	19
第11図 ピット出土遺物 (S=1/4) ……………	12	第23図 出土土製品実測図 (S=1/4) ……………	19
【小郡大原町遺跡】			
		第24図 出土石器・石製品実測図 (S=1/4) ……	19
【横隈上内畑遺跡7】			
第12図 横隈上内畑遺跡7 遺構配置図(S=1/50)…	13	第25図 小郡大原町遺跡 遺構配置図(S=1/50)…	20
		第26図 水路・溝土層断面図 (S=1/40) ……………	22
		第27図 3号水路出土遺物 (S=1/4) ……………	23

表目次

第1表 小坂井屋敷遺跡4 遺物観察表……………	24
第2表 横隈上内畑遺跡7 遺物観察表……………	25
第3表 小郡大原町遺跡 遺物観察表……………	26

図版目次

【小坂井屋敷遺跡4】

- 図版1 小坂井屋敷遺跡4 上空から大板井を臨む
- 図版2 ①小坂井屋敷遺跡4 全景(南西上空から)
②小坂井屋敷遺跡4 全景(北西上空から)
- 図版3 ①1号住居 貼床検出状況(西から)
②1号住居 完掘状況(西から)
③1号住居 土層断面(南東から)
④2号住居 貼床検出状況(南西から)
⑤2号住居カマド遺物出土状況(南西から)
⑥2号住居 完掘状況(南西から)
- 図版4 ①3号住居 土層断面(北西から)
②3号住居 貼床検出状況(東から)
③3号住居 完掘状況(東から)
④1号土坑 完掘状況(南東から)
⑤2号土坑 土層断面(北西から)
⑥2号土坑 完掘状況(北西から)
⑦3号土坑 土層断面(北東から)
⑧3号土坑 完掘状況(南西から)
- 図版5 ①1号溝 完掘状況(北から)
②4号土坑 土層断面(北東から)
③4号土坑 完掘状況(北東から)
④5号土坑 土層断面(西から)
⑤5号土坑 完掘状況(西から)
- 図版6 小坂井屋敷遺跡4 出土遺物

【横隈上内畑遺跡7】

- 図版7 ①横隈上内畑遺跡7 全景(西から)
②1号井戸完掘状況(東から)
③2号井戸完掘状況(北から)
④3号井戸完掘状況(西から)
⑤1号土坑土層(西から)
⑥1号ピット遺物出土状況(南から)
- 図版8 横隈上内畑遺跡7 出土土器
- 図版9 横隈上内畑遺跡7 出土土器・土製品
- 図版10 横隈上内畑遺跡7 出土石製品

【小郡大原町遺跡】

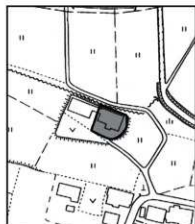
- 図版11 ①小郡大原町遺跡 全景(南西上空から)
②溝状遺構 北側土層断面(北から)
③溝状遺構 中央土層断面(北から)
④溝状遺構 南側土層断面(北から)
⑤1号溝 土層断面(北から)
- 図版12 小郡大原町遺跡 出土遺物

第1章 調査の経過と組織

【小板井屋敷遺跡4】

本遺跡の調査は小郡市小板井567における個人住宅建設に伴って、平成23年8月12日付で埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号1066）が提出されたことに始まる。これを受けて小郡市教育委員会文化財課で試掘調査を行い、古墳時代の遺跡を確認した。これを受けて開発に先立った協議を行った結果、平成23年度国庫補助事業の一環として建物建設部分の発掘調査を実施、翌年に調査報告書を刊行することで同意を得た。調査経過は下記のとおりである。

平成23年10月18日表土剥ぎ開始 19日発掘作業員導入 20日遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成、写真撮影を実施 25日発掘作業員増員 27日遺跡の清掃、高所作業車を使用して全景写真撮影 28日午後より埋め戻し実施・完了 以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成を実施



小板井屋敷遺跡4

【横限上内畑遺跡7】

小郡市横限上内畑1751-3において、9月9日付で個人住宅建築の旨が提出され、試掘調査の結果、工事が遺跡に大きく影響を与えることから、発掘調査を実施する運びとなった。調査は平成23年9月28日から10月26日まで実施。調査の経過は以下のとおりである。

平成23年9月28日表土剥ぎ開始 29日機材搬入 10月3日作業員導入、掘削開始 4日SD 1完掘 13日SK 5実測 14日SK 5完掘 17日SK 9掘削開始 18日調査担当者交代（杉本→坂井へ） 19日SK 6、SK 8、SK 9実測、完掘 21日高所作業車を使つての全体撮影 26日完全撤収

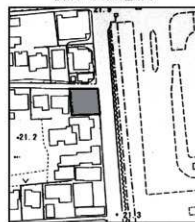


横限上内畑遺跡7

【小郡大原町遺跡】

本遺跡の調査は小郡市小郡字大原町2194-7における個人住宅建設に伴い、平成23年12月6日付で埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号1113）が提出されたことに始まる。小郡市教育委員会文化財課で試掘調査を行い、中近世の遺跡を確認した。これを受けて開発に先立った協議を行い、平成23年度国庫補助事業の一環として建物建設部分の発掘調査を実施、翌年に調査報告書を刊行することで同意を得た。調査経過は下記のとおりである。

平成24年2月21日表土剥ぎ開始 22日機材搬入 23日発掘作業員導入、遺構検出・掘削開始、以後随時遺構掘削、記録図面作成、写真撮影を実施 28日平板測量による遺跡全体図作成 29日埋め戻し実施・完了 以後、図面・遺物整理作業及び報告書作成を実施



小郡大原町遺跡

第1図 調査地点位置図
(S=1/5,000)

【調査の体制】

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部長 吉浦大志博
文化財課長片岡宏二
文化財係長 柏原孝俊
主査 杉本岳史（全ての現地調査）

主任主事 上田 恵
(小板井屋敷遺跡4・小郡大原町遺跡 整理作業)
主 事 龍 孝明
(横限上内畑遺跡7 整理作業)
囑託技師 坂井貴志
(横限上内畑遺跡7 現地調査)

第2章 位置と環境

小郡市は福岡県中部に位置し、東西6km、南北12kmの南北に長い行政区域で、総面積は45.5km²である。筑後平野の最北部にあたり、北部は筑紫野市、筑前町、南東側は久留米市、大刀洗町、西側は佐賀県鳥栖市、基山町に隣接する。市中央部を宝満川が北から貫流し、流域には氾濫原としての沖積地が帯状に形成される。東北部の台地には朝倉山塊末端の独立丘陵である標高130.6mの花立山、西北部には脊振山部から派生する花崗岩の風化土壌で形成される、三国丘陵と呼ばれる低丘陵地帯が広がる。現在の市中心部にあたる中部には2～3万年前に形成された洪積地帯がひろがっている。南部は、これら三国丘陵と花立山の低位に位置する低段丘陵地帯を経て、高度を下げながら平野部へいたる。

旧石器時代の様相は不明な点が多いものの、花立山山麓にあたる筑前町(旧夜須町)でナイフ型石器が表採されている。小郡市内では旧石器時代の包含層は確認されていないが、三国丘陵麓付近の津古内畑遺跡⁸、三国小学校遺跡⁹、一ノ口遺跡¹⁰などでナイフ型石器や細石刃、小郡中尾遺跡¹¹、津古上ノ原遺跡¹²、三沢平田々遺跡¹³で台形石器が表採されている。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代と同様に花立山麓と三国丘陵麓が主である。干潟向畦ヶ浦遺跡¹⁴では草創期末の続円孔文土器が出土している。大崎井牟田遺跡¹⁵では早期押型文の田村式のほかに菅生B式土器が出土している。集落としての様相は掴めないが、炉跡、堅穴状遺構、ピット数基も検出されている。小郡中尾遺跡¹⁶からは早水台式の押型文土器が出土している。干潟向畦ヶ浦遺跡¹⁷からは田村式の資料が調査、採集されている。津古土取遺跡¹⁸では晩期後半の黒川式、山の寺式土器が出土している。横隈山遺跡¹⁹、干潟向畦ヶ浦遺跡²⁰などでは落し穴状遺構200基が検出されているほか、集石遺構や土坑などが検出されている。

弥生時代に入ると力武内畑遺跡²¹で弥生時代前期初頭の集落跡が検出されている。沖積低地に井堰が検出され、板付I式並行期には完成された灌漑技術が玄界灘周辺だけでなく、内陸部にも早い段階に広がっていたことがわかる資料となっている。三国丘陵上には弥生時代前期後半から中期前半、後期から古墳時代初頭にかけての集落群が展開する。横隈北田遺跡²²では弥生時代前期の環濠と貯蔵穴が検出されており、横隈鍋倉遺跡²³では弥生時代前期後半から中期初頭、後期初頭から中頃にかけて集落が営まれている。横隈山遺跡²⁴でも弥生時代前期末から中期初頭にかけての住居、貯蔵穴が検出されている。横隈北田遺跡²⁵からさらに北へ向かうと三国の鼻遺跡²⁶が所在し、弥生時代前期の墳墓群、弥生時代後期の環濠集落が確認されている。また、市中部でも弥生時代前期末から小郡遺跡²⁷、大板井遺跡²⁸を中心に集落が展開しはじめる。集落形成は中期前半から中頃にかけて発達化し、周辺地域でも弥生時代中期、後期に集落形成のピークがみられるなど集落が広範囲にて展開するようになる。横隈上内畑遺跡²⁹では、台地縁辺部に弥生時代前期後半から中期前半、後期から古墳時代初頭にかけての集団墓地が検出されている。特に弥生時代後期から古墳時代初頭の墓地は南北方向にのびる「列埋葬」の構成をなしており、横隈中内畑遺跡³⁰も一連の墓地と考えられる。横隈狐塚遺跡³¹でも独立丘陵上における弥生時代中期後半から後期前半を中心とする集団墓地が検出されており、三国丘陵上には大規模な墓域が展開していた。

三国丘陵では古墳時代以降も墓地が形成され、津古生掛古墳³²、津古2号墳³³、1号墳³⁴、三国の鼻1号墳³⁵などの前期古墳が活発に築造される。横隈山遺跡³⁶や三沢畝道遺跡³⁷、津古生掛古墳の周囲で方形周溝墓が確認されており、寺福童遺跡³⁸でも古墳時代初頭の方形周溝墓が確認されている。同時期の集落としては、津古生掛遺跡³⁹や大崎中ノ前遺跡⁴⁰、小板井屋敷遺跡⁴¹などが挙げられ、大崎小園遺跡⁴²では庄内系土器の器形、技法の影響を強く受けた在地生産土器を伴う住居が検出されており、他地域との交流が活発であったと想定される。津古生掛古墳⁴³、津古片曾葉古墳⁴⁴でも外来系土器が多量に出土している。一方で福童町遺跡⁴⁵など器形、技法ともに在地系の土器しか出土しない地域もある。古墳時代中期は小規模な集落が散在しており、西島遺跡⁴⁶では滑石製品の製作工房と考えられる住居が検出されている。三国の鼻1号墳⁴⁷に続く首長墳は、西島遺跡⁴⁸に近接する花罌2号墳⁴⁹、1号墳⁵⁰が挙げられる。調査前に破壊されており、詳細は不明であるが、5世紀前半代までは首長墓系列が存続していたことがうかがえる。5世紀代の古墳については調査例が少ないが、横隈鍋倉遺跡⁵¹では初期の横穴墓が2基確認されている。三国丘陵上では最後の前方後円墳となる横隈山古墳⁵²(平成25年度報告予定)は出土した円筒埴輪などから5世紀中頃から後半の築造と考えられる。5世紀前半以降、



1. 小坂井屋敷 2. 横隈上内畑 7 3. 小部大原町 4. 津古内畑 5. 三国小学校 6. 一ノ口 7. 小部中尾 8. 津古上ノ原 9. 三沢牟田々
10. 千瀬向畦ヶ浦 11. 大崎井牟田 12. 津古土取 13. 横隈山 14. 力武内畑 15. 横隈北田 16. 横隈銅倉 17. 三国の鼻 18. 小部 (官衙)
19. 大坂井 20. 横隈中内畑 21. 横隈孤塚 22. 津古生掛 23. 津古 2号墳 24. 津古 1号墳 25. 三沢畝道町 26. 寺福童 27. 大崎中ノ前
28. 小坂井屋敷 29. 大崎小圃 30. 津古片曾葉 31. 福童町 32. 西島 33. 花躰 2号墳 34. 花躰 1号墳 35. 横隈山古墳 36. 三沢栗原
37. 井上薬師堂東 38. 井上北内原 39. 花立山古墳群 40. 花立山穴観音古墳 41. 三沢古墳群 42. 三沢京江ヶ浦 43. 干海城山
44. 上岩田 45. 小部前伏 46. 松崎六本松 47. 稲吉元矢次 48. 横隈仕解田 49. 大保龍頭 50. 小部正沢 51. 大保西小路 52. 小部野口
53. 福童山の上 54. 三沢機道 55. 井上薬師堂 56. 三沢寺小路 57. 津古空前 58. 北牟田 59. 横隈十三塚 60. 三沢古賀 61. 力武宮脇

第2図 小郡市内遺跡分布図 (S=1/50,000)

三国丘陵では三国の鼻遺跡¹¹、津古生掛遺跡¹²、三沢栗原遺跡¹³、西島遺跡¹⁴などで集落の形成が活発化し、6世紀中頃以降には丘陵全域に集落が形成される。市中部では大崎小園遺跡¹⁵、大板井遺跡¹⁶、井上粟師堂遺跡¹⁷、井上北内原遺跡¹⁸などで集落が形成される。花立山山麓に展開する花立山古墳群¹⁹は古墳時代後期を主体とする300基を超える群集墳が形成される。花立山穴観音古墳²⁰は花立山古墳群唯一の前方後円墳で、全長11mの大型石室をもち、玄室には斜格子を中心とした線刻がみられる。一方、三国丘陵でも三沢古墳群²¹や津古内畑古墳群²²などの群集墳が展開するほか、三沢古墳群²³、三沢京江ヶ浦遺跡²⁴では横穴墓が築造される。7～8世紀代には、花立山周辺の干潟城山遺跡²⁵や上岩田遺跡²⁶など中核的な大規模集落が宝満川左岸に展開するほか、市中部でも小郡官衙遺跡²⁷と重なる時期に集落形成のピークがみられる。

古代の小郡は、筑後川以北の筑後国御原郡と筑後川をまたぐ筑後国御井郡の2郡で構成され、国府は御井郡に所在する。御原郡は小郡市の北半と三井郡大刀洗町のほぼ全域にあたる。北東に筑前国、西側に肥前国と接しており「三国」の地名が残る。花立山は筑前国と筑後国の国境となっており、筑前国、肥前国、筑後国の国境は人為的な直線で結ばれている。御原郡衙に比定される小郡官衙遺跡²⁸は、宝満川右岸の低位段丘上に位置する。官衙遺跡の南に位置する小郡前伏遺跡²⁹では「郡庁」へと向かう幅6mの官道が検出されており、延長上にあたる松崎六本松遺跡³⁰で伝路が想定されている。また、肥前国国境に接する西島遺跡³¹5区では、溝で区画された大型の掘立建物などが検出されているほか、瓦や墨書土器、製塩土器などが出土している。西海道基幹駅推定地に近接しており、関連施設である可能性が述べられている。9世紀代は大崎中ノ前遺跡³²などで遺構が検出され、稲吉元矢次遺跡³³では大型の掘立建物が発出されているほか、越州窯系磁器が出土している。横隈分解田遺跡³⁴では、溝から9世紀代の瓦が出土しており、周辺に寺院、館などの建物が存在する可能性がある。9世紀前半以降は集落立地が大きく変化すると考えられる。

中世以降の様相は、古代以前と比べるとほとんど明らかになっていない。大保龍頭遺跡³⁵では11世紀後半の集落が確認されている。稲吉元矢次遺跡³⁶では区画溝をもつ集落が形成され、青白磁が大量に出土している。西島遺跡³⁷3・4区でも青白磁が大量に出土しており、拠点的な集落と推定される。そのほか中世の遺跡として、小郡正尻遺跡³⁸、大板井遺跡³⁹、大崎小園遺跡⁴⁰、大保西小路遺跡⁴¹、小郡野口遺跡⁴²、福童山の土遺跡⁴³、三沢榎道遺跡⁴⁴、小板井屋敷遺跡⁴⁵などで12世紀前半以降に集落が形成されるほか、上岩田遺跡⁴⁶、井上粟師堂遺跡⁴⁷でも当該期の遺構が検出されている。三沢寺小路遺跡⁴⁸は大保原合戦(1359年)の戦死者を供養するために建てられた「善風寺」跡と伝承されている。墓地については、三沢峠道町遺跡⁴⁹、津古土取遺跡⁵⁰、津古空前遺跡⁵¹、北牟田遺跡⁵²、横隈十三塚遺跡⁵³で方形周溝墓が検出されている。津古遺跡群、大板井遺跡⁵⁴の土坑墓や西島遺跡⁵⁵3区の木棺墓などが埋葬施設として挙げられるほか、三沢古賀遺跡⁵⁶や大保西小路遺跡⁵⁷で確認された地下式土坑も埋葬施設と考えられている。

近世に入ると、長崎街道、薩摩街道といった街道筋に宿場町が形成された。大崎付近に久留米藩浪人荒巻家の居住地が想定されており、周辺では肥前陶磁器を中心とした近世陶磁器類が多く出土する。また、長崎街道の田代宿と松崎宿を結ぶ区間が大崎から稲吉にかけて想定されている。久留米城下から筑前へと通じる「横隈街道・筑前街道」にあたる横隈には宿場町が形成された。のちに久留米藩の支藩である松崎藩には松崎宿が設置され、延宝6(1678)年には「松崎街道・筑前街道」の開設に伴い、横隈宿駅は廃止されることとなった。さらに元禄8(1696)年に記された『啓忠録』には横隈町の名がみられず、元禄14年までには横隈村に戻されている。松崎町、松崎街道の成立に伴い、在郷町としての機能低下を示している。横隈町の南端に接する力武の「町口」という小字名もこの名残であろうか。三国小学校遺跡⁵⁸3次調査では江戸時代の遺構、遺物が発出されたほか、力武官脇遺跡⁵⁹では、区画溝が検出され、屋敷の存在が想定されている。そのほか薩摩街道、一里塚、国境石などが存在する。

小郡市は三国丘陵の大規模開発や市中部の頻発する開発に伴う発掘調査によって、弥生時代から古墳時代、古代にかけての様相が明らかになりつつあるが、中世、近世にかけては不明な点も多く、今後の発掘調査の成果が期待される。



第3図 小板井屋敷遺跡4 遺構配置図 (S=1/50)

第3章 調査の成果

(1) 小坂井屋敷遺跡 4

【調査の概要】

小坂井屋敷遺跡は、小郡市北部の丘陵部からなだらかに続く低台地の縁辺部に位置し、これまで計3次の調査が実施されている。台地を縦断するように中・近世の遺構が点在しており、北半部では部分的に古墳時代の集落跡が、南半部では弥生時代中期～古墳時代初頭の集落跡が確認されている。

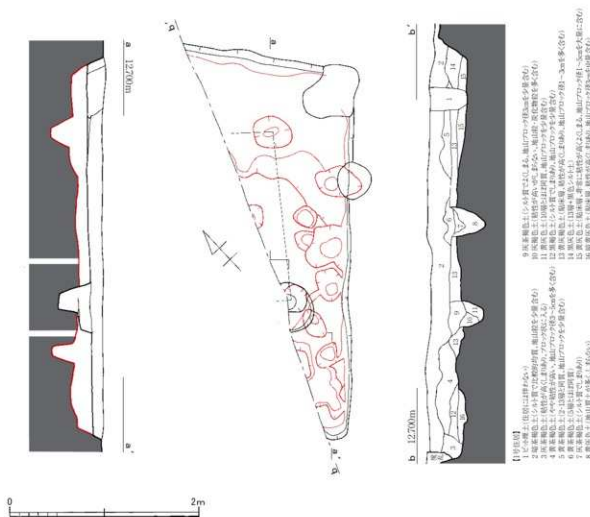
今回の調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地の北端に相当する。建物建設部分のみであったため、東西9.5m、南北7.5mの非常に矮小な範囲である。遺構検出面の標高は12.5m前後、現地表から約0.6m下る高さで確認している。出土遺構は竪穴住居3軒、土坑5基、溝5条とピット群である。ピットには掘立柱建物を構成するものは認められなかった。

【遺構と遺物】

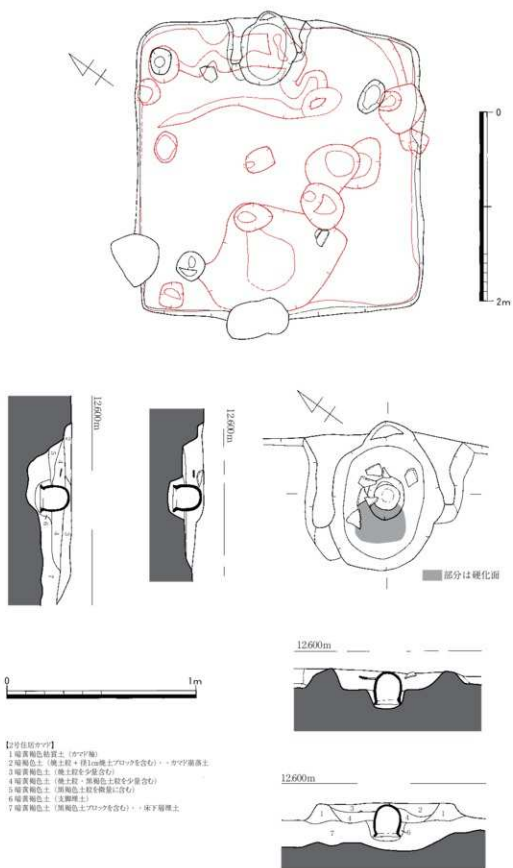
1. 住居

1号住居 (第4図・図版3)

調査区西端に位置し、大半は調査区外へ延長する。主軸は北東―南西方向で、3号住居とほぼ一致するが、規模は異なる。平面プランは一辺3.95～4.0mの方形を呈すると思われる。遺構の残存状況は比較的良好で、壁面は平均30cm残存している。主柱穴は2本のみ確認しているが、全体には4本が巡ると想定される。周壁溝や屋内土坑に該当する施設は見られない。



第4図 1号住居平・断面図 (S=1/40)



第5図 2号住居及びカマド平・断面図 (S=1/20・1/40)

出土遺物（第6図・図版6）

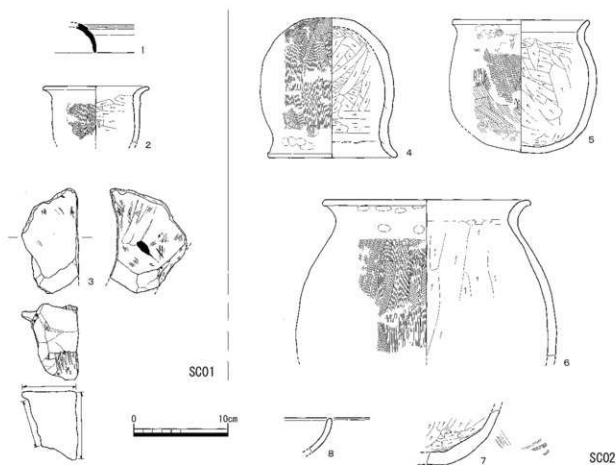
埋土から遺物は出土しておらず、貼床内および下層に少量見られるのみであった。1は須恵器の坏蓋片。頂部側にわずかにケズリ部分が残存している。2は土師器の小型甕。頸部が肥厚し、外反する口縁端部は薄く仕上げられるもの。外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリ。3は流紋岩の砥石。上面の砥面は非常に良く使用されており、大きく湾曲する。

2号住居（第5図・図版3）

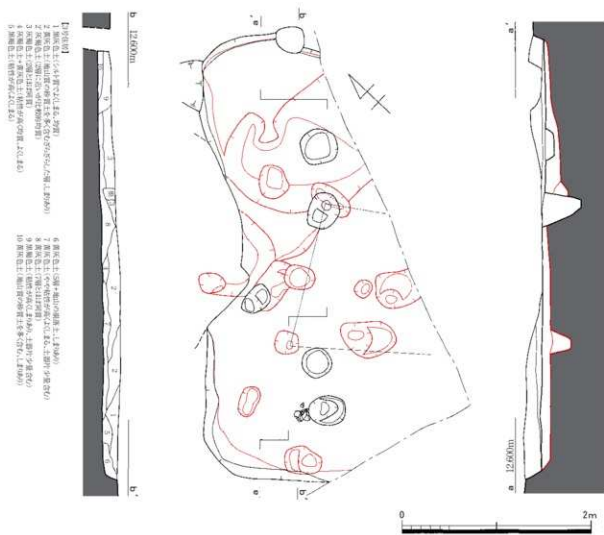
調査区中央南寄りに位置し、1・3・4号土坑を切る。主軸は北東—南西方向で、北辺中央にカマドを持つ。平面プランは一辺2.9mの方形を呈するが、北西—南東辺の両端はやや丸みを帯びる。遺構の残存状況は悪く、上部が大きく削平されている。床面・貼床下にピット状の掘り込みが複数見られるが、いずれも浅く、主柱穴は未確認である。カマドは北東辺の中央に構築されている。粘土を馬蹄形状に張り出すように盛り上げて設置している。袖部の最大幅23cm、残存高13cmを測る。中央には径20cmの円形掘り込みがあり、これを塞ぐように土師器甕が伏せられた状態で出土している。支脚として使用したと思われる。カマドの焚口部分は比熱による硬化が認められる。焼土や炭化物等の面的な広がりは確認されなかった。

出土遺物（第6図・図版6）

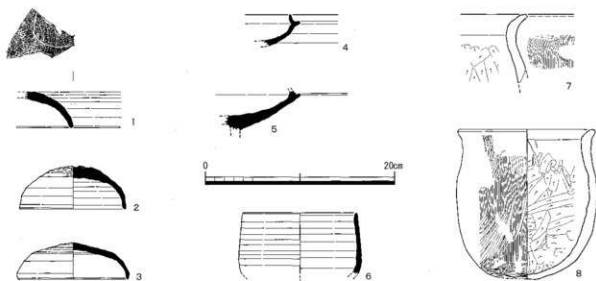
埋土に含まれる遺物は小片が極少量であり、形状をとどめる遺物はカマド周辺に集中している。4～7は土師器甕、8は土師器坏。4はカマド支脚として使用されていたもの、胴部外面に煤の付着が認められる。5はカマド周辺から出土したもの。外面は2種類のハケで調整される。胴部外面には煤が付着している。6・7はカマド内から出土しており、同一個体と推測される。口縁部から胴部にかけて濃淡はあるが全体に煤の付着が見られる。甕類はいずれも口縁部が頸部からゆるやかに外反し、内面のケズリ調整に由来する屈曲がないタイプのものである。8の坏は内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。



第6図 1・2号住居出土遺物 (S=1/4)



第7图 3号住居平·断面图 (S=1/40)



第8图 3号住居出土遗物 (S=1/4)

3号住居（第7図・図版4）

調査区南東隅に位置し、東半部が調査区外へ延長する。2号土坑に切られ、5号土坑を切る。1号溝との先後関係は不明である。主軸は北東—南西方向で、平面プランは一辺4.5～4.7mの隅丸方形を呈するとと思われる。遺構上部は削平を受けており、1号住居と比較すると残りが悪い。主柱穴は南西側の2本のみ確認しているが、全体には4本が巡ると考えられる。貼床下は北隅のみが意図的に深く掘り込まれている。カマド・周壁溝・屋内土坑等の付随施設は検出されていない。

出土遺物（第8図・図版6）

埋土及び貼床内から遺物が出土しているが、量はそれほど多くはない。1～3は須恵器の灯蓋。1・2は頂部まで回転ヘラケズリを、3は外面の一部に回転ヘラケズリののち頂部のみ手持ちヘラケズリを施している。4は須恵器杯身。受部は端部が厚く丸みを持つ。5は須恵器高杯の杯部。6は須恵器鉢。内外面ともナゲ調整に由来する凹凸が目立つ。7・8は土師器甕。8は第7図に出土状況が記載されている資料で、内面ヘラケズリ、外面タテハケの丁寧な調整を施す。底部外面に煤の付着が認められる。

2. 土坑

1号土坑（第9図・図版4）

調査区中央に位置し、2号住居に切られる。主軸は北東—南西方向、平面プランは不整形円形を呈し、北東側にテラスを持つ。南北長2.1m、東西幅1.35m、深さ最大0.8mを測る。

遺物の出土は認められない。

2号土坑（第9図・図版4）

調査区中央東寄りに位置する。3号住居を切り、ビツ群に切られる。主軸は北東—南西方向で平面プランは不整形円形を呈する。東西両側にテラスを持ち、底面にビツ2基が付随している。南北長1.7m、東西幅1.5m、深さ最大0.3mを測る。自然堆積により埋没したと考えられる。

遺物の出土は認められない。

3号土坑（第9図・図版4）

調査区南端に位置する。2号住居及びビツに切られ、4号土坑を切る。上面が削平されており、残存状況は悪い。遺構の南半部は調査区外へ延長する。平面プランは不整形形を呈し、南北残存長1.2m、東西幅2.0mを測る。

出土遺物（第10図）

埋土から少量の土器が出土している。1は土師器杯。口縁部及び内面はナゲ調整、外面底部は手持ちヘラケズリを施す。口縁部は体部と比較するとやや厚く、直立するタイプのもの。2は土師器甕。口縁部は短く外反する。

4号土坑（第9図・図版5）

調査区南端に位置し、2号住居・3号土坑及びビツ群に切られる。遺構の大部分は調査区外に所在しており、平面プランは不整形形を呈すると思われる。底面にはビツ状の浅い掘り込みが複数認められる。南北残存長0.7m、東西残存幅1.6mを測る。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたと考えられる。

少量の遺物が出土しているが、小片のため時期の特定は困難であった。

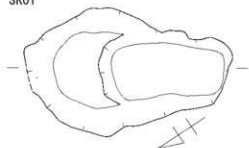
5号土坑（第9図・図版5）

調査区南東隅に位置し、3号住居に切られる。遺構の東半部は調査区外へ延長しており、平面プランは不整形形を呈すると思われる。上部は大きく削平されており、遺構の残存状況は悪い。南北残存長1.2m、東西残存幅0.7mを測る。南西隅に浅いビツ状の掘り込みが見られる。

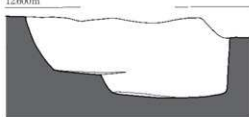
出土遺物（第10図）

埋土から極少量の土器が出土している。3は土師器高杯の脚部。破断面に穿孔の痕跡が見られる。全体に磨減が激しく調整は不明瞭である。4は土師器甕の底部。内面ヘラケズリ、外面タテハケを施し、部分的に煤の付着が認められる。ここでは5号土坑出土遺物として取り扱うが、3号住居に伴う可能性が高い。

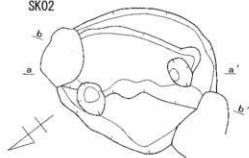
SK01



12600m



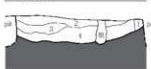
SK02



a 12600m a'



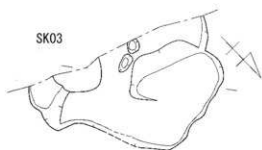
b 12600m b'



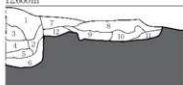
【2号土層】

- 1 黒褐色土(若干分厚で少し砂質土)
- 2 黒褐色土(若干分厚で少し硬い、地山質の砂質土を多く含む)
- 3 黒褐色土(2層に似ている性質)
- 4 黒褐色土(若干分厚で少し砂質土、地山質のブロック1-3cm多(含む))

SK03



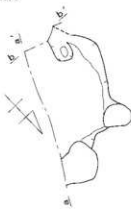
12600m



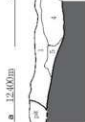
【1号土層】

- 1 黒褐色土(若干分厚で少し硬い、均質)
- 2 黒褐色土(若干分厚で少し砂質土、地山質を少量含む)
- 3 黒褐色土(2層に似ている性質で、少し硬い)
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土(粘性が強い、少し硬い)
- 6 明茶褐色土(硬質の粘土、砂質で、少し硬い)
- 7 灰黒褐色土(若干分厚で、少し硬い、均質)
- 8 黒褐色土(2層に似ている性質、地山質を多く含む)
- 9 灰褐色土(砂質を多く含む、少し硬い)
- 10 黒褐色土(ブロック)
- 11 黒褐色土(少量の河質)

SK05



a 12400m



b 12400m b'



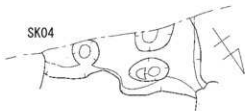
【4号土層】

- 1 黒褐色土(明茶褐色ブロック土層を少量含む、やや硬い)
- 2 黒褐色土(やや硬い)
- 3 灰黒褐色土(2層とほぼ同質、明茶褐色ブロック含む)
- 4 黒褐色土(粘性が強い)
- 5 黒褐色土(粘性ブロックを少量含む)
- 6 明茶褐色土(明茶褐色ブロック少量含む)
- 7 黒褐色土(やや硬い)
- 8 明茶褐色土(硬い、粘性ブロックを多く含む)
- 9 灰褐色土+明茶褐色土+黒褐色土(やや硬い)
- 10 明茶褐色土(明茶褐色ブロックを少量含む)
- 11 明茶褐色土(固い)
- 12 明茶褐色土(明茶褐色ブロックを多く含む)

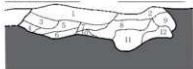
【5号土層】

- 1 黒褐色土(やや硬い)
- 2 明茶褐色粘土(明茶褐色粘土を多く含む)
- 3 明茶褐色粘土(明茶褐色粘土を少量含む)
- 4 明茶褐色粘土(地山ブロック少量含む)
- 5 明茶褐色粘土+明茶褐色土(たま)

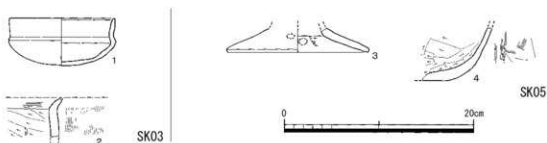
SK04



12600m



第9図 1~5号土坑平・断面図 (S=1/40)



第10図 土坑出土遺物 (S=1/4)

3. その他の遺構

1号溝 (第3図・図版5)

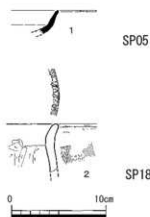
調査区北東部に位置し、北西—南東方向に流れる。3号住居・2号土坑に隣接するが、先後関係は不明である。全長3.5m、最大幅0.5m、深さ15cmを測る。断面は長方形へ逆台形を呈し、南東隅が深く掘り込まれている。埋土から少量の土器が出土しているが、いずれも細片で時期の特定は困難であった。

5号ビット (第3図)

調査区西寄り、2号住居の南西辺を切って掘り込まれている。平面プランは不整形形で、深さは50cmを測る。

出土遺物 (第11図)

1は須恵器高杯の坏部。外面に工具痕が一部残存しており、ヘラ記号の可能性も考えられる。



第11図 ビット出土遺物 (S=1/4)

18号ビット (第3図)

調査区南西隅、1号住居に切られた状態で検出している。平面プランは円形で、深さは30cmを測る。

出土遺物 (第11図)

2は土師器甕の小片。全体に摩滅が著しい。口縁端部には不定間隔の工具痕跡が認められる。

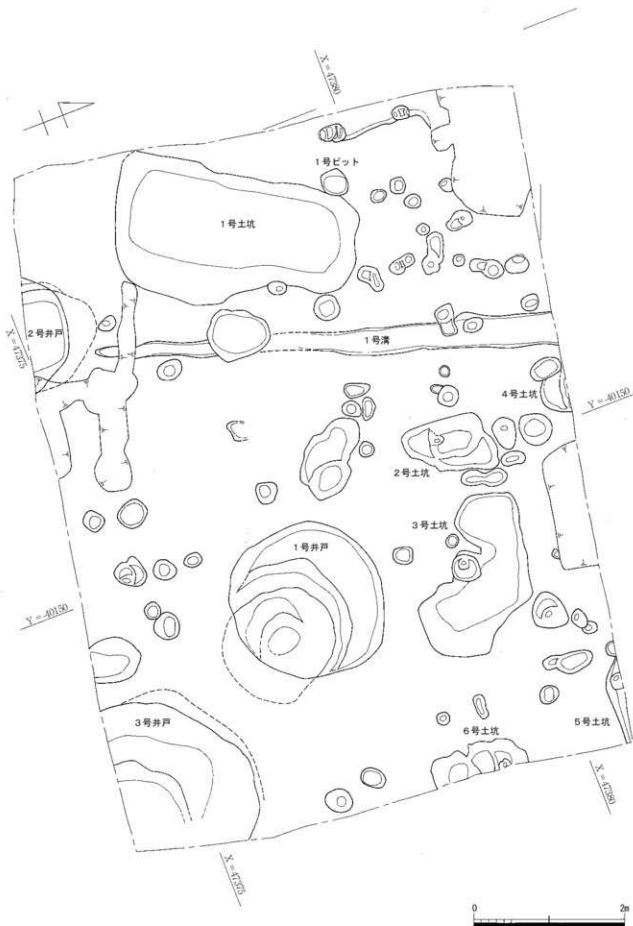
【小結】

これまでの発掘調査において、「小板井屋敷遺跡」は低台地上の南北に長い範囲と想定されており、中心となるのは全域に渡って確認されている中・近世の集落である。南端に位置する1次調査地では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて連続性を持つ集落域が確認されており、北端では古墳時代後期、低台地の西沿いでは中・近世の集落が南北に幅広い範囲で見つかっている。なおこの遺跡の西側には、小規模な谷を隔てて古墳時代後期の集落を主体とする「小板井運輸遺跡」が所在することが判明している。

今回の調査区で検出された遺構は古墳時代のもを主体とし、前期 (5号土坑)、後期前半 (3号土坑)、後期後半 (1～3号住居) に大分される。住居群の構築時期には大きな差は見られず、同位置での短期間の建替えも想定される。これらの住居は出土遺物や主軸方向から、2次調査地B区で検出した住居とほぼ同時期のものと考えられる。但し、弥生時代や中・近世の遺物は、今回調査区内からは全く見つかっていない。

このような状況から、集落域としての当遺跡は以下のような変遷が推測される。まず、舌状に張り出した台地の南先端部に弥生時代中期の集落が成立し、古墳時代初頭まで継続する。その後、古墳時代後期には集落の中心が台地の根元に相当する北端へ移動し、住居群や井戸が構築される。奈良・平安時代は一旦空白となるが、これは小郡市内の遺跡各所で見られる現象であり、今後の調査成果から律令制下の土地利用統制の問題と併せて検討が必要だろう。中世になると集落域は再び台地の南端まで拡大し、これが近世代まで継続する。中世初頭には、宝満川を隔てた対岸に拠点集落と想定されている稲吉元矢次遺跡の集落が成立しており、当遺跡との関連が注目される。また江戸時代前期の小板井には、筑前街道 (横隈街道) が通っていたことから、街道筋の農村集落として独自の発展も推定される。

小板井区は平成19年度に市街化区域に編入され、近年発掘調査が集中している地域である。今後の調査により、さらなる資料の蓄積とその分析が期待される。



第12図 横限上内畑遺跡7 遺構配置図 (S=1/50)

(2) 横隈上内畑遺跡 7

【遺跡の概要】

本調査区は、標高 20m 前後の台地上の平坦地であり、表土除去後の調査区内の標高差は約 10cm である。2次調査地点から南へ約 20m に位置する。過去の調査において、近世の時期を確定できたものは限られている。今回の調査によって検出された主な遺構は井戸3基、土坑6基、溝1条、ピット多数である。横隈孤塚遺跡Ⅱや横隈上内畑遺跡、横隈中内畑遺跡など周辺で確認されている弥生時代から古墳時代の墓地は検出されなかった。出土遺物は 17 世紀前半から 18 世紀代の陶磁器が中心である。今回の調査によって近世の横隈における集落の一端がうかがえた。

なお、各遺物の詳細については、後述の遺物観察表を参照いただきたい。

【遺構と遺物】

1. 井戸

1号井戸 (第13図・図版7)

平面プラン円形を呈する素掘りの井戸で、径 1.5m、現況からの深さ 1.2m を測る。北西側の壁面は一部オーバーハングする。埋土上層から複数の花崗岩礫が出土している。

出土遺物 (第16図・図版8)

土師皿、羽釜、瓦器の鉢、羽釜、陶器播鉢である。1~3は土師皿で、1は上層からの出土。底部復元径 4.9cm である。2は底部径 5.0cm、回転糸切り。内面は磨滅し調整不明。工具痕が残る。3は底部付近しか残存せず、磨滅が著しく調整不明。底部は回転糸切り。4は土師器の鉢か。口縁部のみ残存する。口縁部は折り曲げによって肥厚させる。内外面ともにナデで、外面体部は指頭圧痕が残る。5は瓦器の鉢と思われるが、焼成が甘い。4と異なり素口縁で内外面ともにハケ目が残る。6、7は陶器播鉢である。6は底部付近から体部にかけて、播目が放射状にのびる。7は播目が少なく、底部にも播目がつく。8、9は釜である。8は土師器で、やや内傾する口縁部をもち、肩部に耳がつく。体部は欠損するが、羽のつく可能性がある。9は瓦器の羽釜で肩が張る。頸部下の肩部に1条の沈線と2個一組の竹管文が巡る。胴部内面下半はハケ目調整。体部下半は厚く煤が付着している。

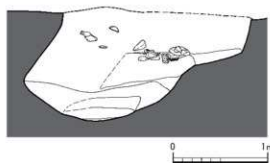
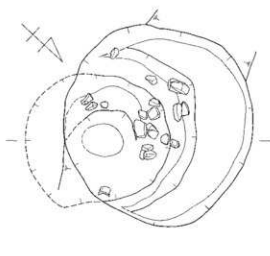
そのほかに土師器の皿2点、鉢1点、播鉢1点が出土しているが細片のため図示しえなかった。

2号井戸 (第14図・図版7)

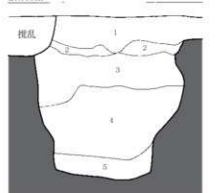
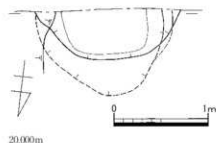
平面プランは隅丸方形を呈すると思われる素掘りの井戸で、南側は調査区外へと続く。上面の一部を攪乱に削られる。規模は一辺約 1m、深さは 1.45m を測る。埋土はほぼ水平堆積である。1号井戸と同様に花崗岩礫が数点出土した。

出土遺物 (第16図)

すべて土師器で皿、碗、鍋である。10は土師皿で底部付近のみ残存。底部は回転糸切り。11は高

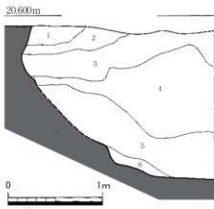
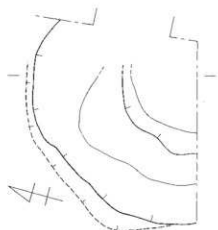


第13図 1号井戸実測図 (S=1/40)



【埋土層】
 1 灰褐色土(密土)
 2 灰褐色土(母質褐色粒2%含む)
 3 赤色粘質土(赤褐色土70%・赤褐色土10%含む)
 4 赤色粘質土(母質褐色土粒、灰白色土粒5%含む)
 5 黒色土(母粒10%含む)

第14図 2号井戸実測図 (S=1/40)



15号井戸
1 赤褐色土(中砂, 鉄粉多)
2 黒色粘質土(白色粘土中に混在)
3 灰青色の砂質土(黒色粘土中に混在)(中砂, 鉄粉多)
4 灰青色粘土(黒色粘質土, 暗褐色粘質土にプロックを混在)
5 黄褐色粘質土(中砂, 土塊多, 鉄粉多)
6 灰白色粘土(黒褐色の土塊多)

第15図 3号井戸実測図 (S=1/40)

台がつく碗で高台との接合部は指頭圧痕が明瞭に残る。12は鍋で外面被熱。口縁部外面には指頭圧痕が残る。13は鉢で口縁部付近のみ残存。磨滅が著しく調整不明瞭。

その他に鍋と鉢が出土しているが、細片のため実測しえなかった。

3号井戸 (第15図・図版7)

調査区内でもっとも規模が大きい素掘りの井戸。調査区外へと続く。約4分の1を検出している。平面プランは円形と推定される。現状での推定径は3m、深さは1.56mを測る。埋土に鉄分を多く含む灰白色粘土が大量に堆積していた。

出土遺物 (第16図・図版8)

14、15は土師皿で底部は回転糸切り。16は青磁碗で高台内は褐釉がかかる。17は鍋で外面は指頭圧痕、内面は細かなハケ目調整。そのほかに須恵器坏身が1点出土しているが細片のため実測しえなかった。底部にはヘラ記号がみられる。

出土石製品 (第24図・図版10)

3は安山岩系の石製品。裏側は破損しており、全形、用途ともに不明である。やや逆台形を呈する形状になると思われる。外面は工具による石割の痕跡がみられるが、風化が著しい。上下面は被熱し灰黒色に変色する。また、上面中央付近に溝状のくぼみと、その横には研磨された平坦面がみられる。五輪塔の一部とも考えられるが、確証を得ない。下面の穴は裏側の破損部へと貫通するが、鉱物の抜け痕であり穿孔ではない。

2. 土坑

1号土坑 (第17図・図版7)

一部が張り出すが、平面プランは隅丸の長方形を呈する廃棄土坑。長軸で3.25m、短軸で1.76mを測る。出土遺物は遺構全体に散乱しているが、特に北西端に集中している。床面からはやや浮いた状態で出土している。出土遺物は17世紀前半から18世紀前半で、埋没時期は18世紀前半であろう。

出土遺物 (第19図・図版8)

土師器、須恵器、陶磁器のほか土製品1点、石製品2点が出土している。

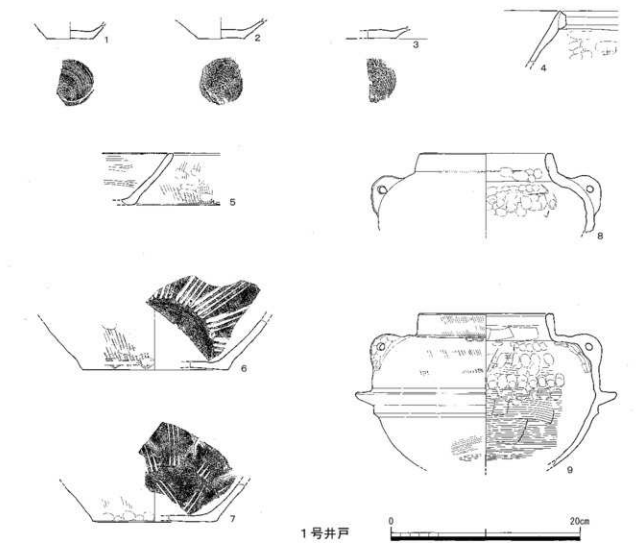
1は須恵器甕である。底部は回転ヘラ切り後ナデ。2は土師皿で底部復元径4.4cm。底部は回転糸切り。3は瓦質の鉢であるが焼成が甘くほぼ土師質である。外面は磨滅し調整不明瞭。4は陶器甕で口縁部のみ残存。口縁部は逆三角形を呈す。上面はクロ水引きによって調整され、内外ともに軸がかかる。17世紀前半。5、6は陶器播鉢で底部付近のみ残存。ともに外面はクロ水引きで、内面の描目は細かい。18世紀前半頃か。7は瓦器の深鉢で口縁部は粘土貼り付けによって肥厚する。内外ともにハケ目調整。口縁部上面にもハケ目調整が施される。口唇部の内面一部にケズリがみられ、口縁形態が安定しない。8は陶器瓶で内外ともにクロ水引きで削り出し高台。体部内面は無軸だが、底部付近はまだらに軸がかかる。外面は褐釉をかけ、上半に灰白色の釉をかけた後、上部から鉄釉を流している。畳み付きは露胎。9は磁器染付蓋で口径9.2cm、高台径3.2cm、器高2.8cm。外面は山水文と建物が描かれる。

出土土製品 (第23図・図版9)

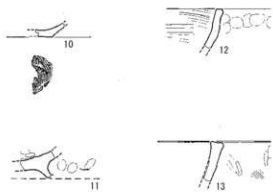
1は箱型の焔炉と思われる。底部は脚部から緩やかに立ち上がり弧状となる。底部外面は指オサエの後、ナデ調整で、底部内面はやや粗いナデが施される。外面は磨き調整。内面に被熱の痕跡はみられない。

出土石器 (第24図・図版10)

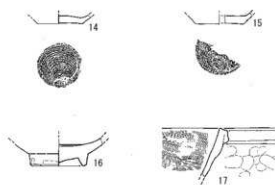
流紋岩の砥石1点、石臼1点が出土している。1は流紋岩の砥石で4面が使用され、断面は菱形に磨り減っている。一部線条痕が残る。長軸の下面は打ち欠きによって故意に割られる。2は石臼でススが厚く付着する。



2号井戸



3号井戸

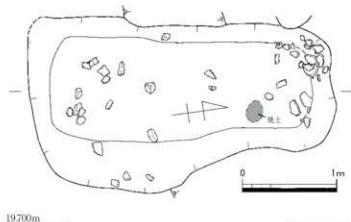


第16図 1～3号井戸出土土器実測図 (S=1/4)

そのほかに鉄釘1点と須恵器の大甕片が2、3個体分出土している。甕は接合しなかったため、器形は不明である。

2号土坑 (第12図)

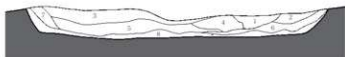
調査区中央やや北寄りで検出された不定形の土坑。長軸45cm、短軸30cmを測る。出土遺物なし。



19.700m



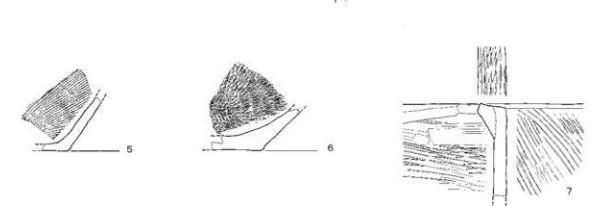
19.700m



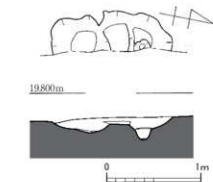
【1号土坑】

- 1 灰褐色土（層状高L、約あり、明褐色フタツキを少量含む）
- 2 灰褐色粘質土（よじよ）
- 3 灰褐色粘質土（灰白色粘土フタツキを少量含む）
- 4 灰褐色土（第1層以降の底土）
- 5 灰褐色土（底白色粘土フタツキを多く含む、10cm大の塊、遺物を含む）
- 6 灰褐色粘質土（較子堀）
- 7 灰褐色土（粘性高L、よじよ）
- ※ 灰白色土（フタツキ層）
- 第1層～第4層は人為的埋め戻し。

第17図 1号土坑実測図 (S=1/40)



第19図 1号土坑出土土器実測図 (S=1/4)



第18図 6号土坑実測図 (S=1/40)

3号土坑 (第12図)

2号土坑の東側で検出された不定形の大型土坑。長軸93cm、短軸42cmを測る。

土師器鍋が1点出土しているが、細片のため図示しえなかった。

4号土坑 (第12図)

調査区北端で検出された土坑。調査区外にのびており平面プランは不明。楕円形か。出土遺物なし。

5号土坑 (第12図)

調査区北東端で検出された土坑。大半が調査区外にのびており、平面プランは不明。

磁器碗口縁部と陶器鉢が出土しているが、細片のため図示しなかった。

6号土坑 (第18図)

断面形から2基のピットと考えられる。土師皿と陶器播鉢が各1点出土しているが細片のため図示しなかった。

3. 溝

1号溝 (第12図)

調査区を南北に走る溝。南側で収束する。幅は最大45cm、深さは2~5cmしか遺存しない。出土遺物なし。

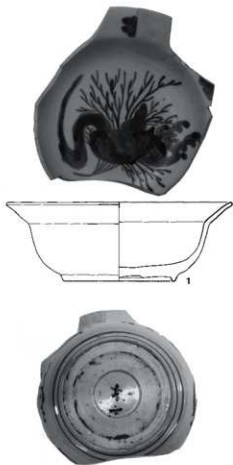
4. その他の遺構と遺物

1号ピット (第20図・図版7)

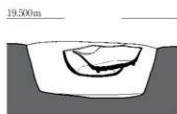
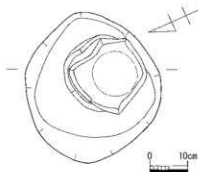
1号土坑を切るピット。遺構内には磁器鉢と陶器瓶が重なった状態で出土している。上面は削平されており、それに伴って土器も上部が破損している。原位置は留めていない。床面からは浮いた状態である。地鎮遺構の可能性もあるが、廃棄用のピットと考えたい。埋没時期は18世紀前半で、1号土坑との間に大きな時期差はみられない。

出土遺物 (第21図・図版8、9)

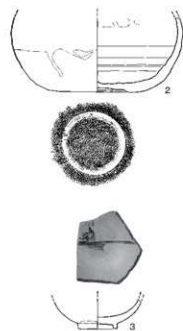
磁器染付鉢、陶器瓶、陶器碗の3点が出土した。1は磁器染付鉢である。底部から緩やかに体部が立ち上がり、口縁部は外側へ強く屈曲し、直線状にのびる。見込みには鮑や巻貝、海藻などの海産物が描かれる。体部外面には唐草文が描かれる。底部は蛇目回形の底部となっており、砂目が輪状に残る。高台内には「患」の銘が描かれる。2は陶器瓶である。内外面ともにロクロ水引きで、底部は回転糸切りの痕跡が残る。胴部最大径は18.1cmを測る。肩部から上は残存しないが、一部無軸である。3は磁器碗である。底部付近が残存する。高台は削り出して、高台付近から底部にかけて露胎する。



第21図 1号ピット出土土器実測図 (S=1/4)



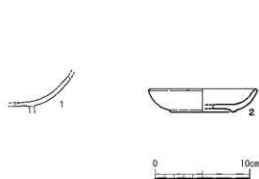
第20図 1号ピット実測図 (S=1/10)



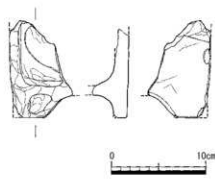
その他の出土遺物（第22図・図版9）

1から3は遺構検出時の出土遺物で磁器染付碗である。1は呉須の発色が悪く文様が不明瞭である。外面には葉文が描かれる。内面の文様は不明。2は型紙刷りで草葉文が描かれる。3は見込みに2重圏線、内面に葉文が描かれる。外面口縁部にも圏線が巡る。

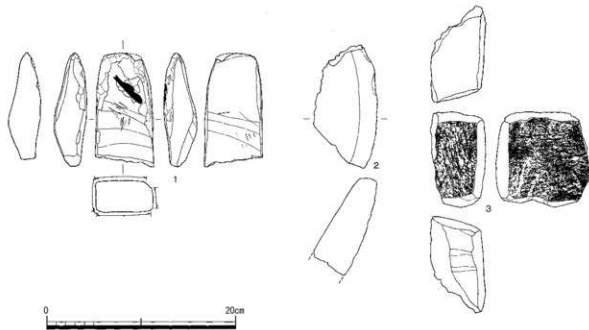
そのほかピットから陶器挿鉢片が出土しているが、細片のため図示しえなかった。



第22図 遺構検出時出土土器実測図 (S=1/4)



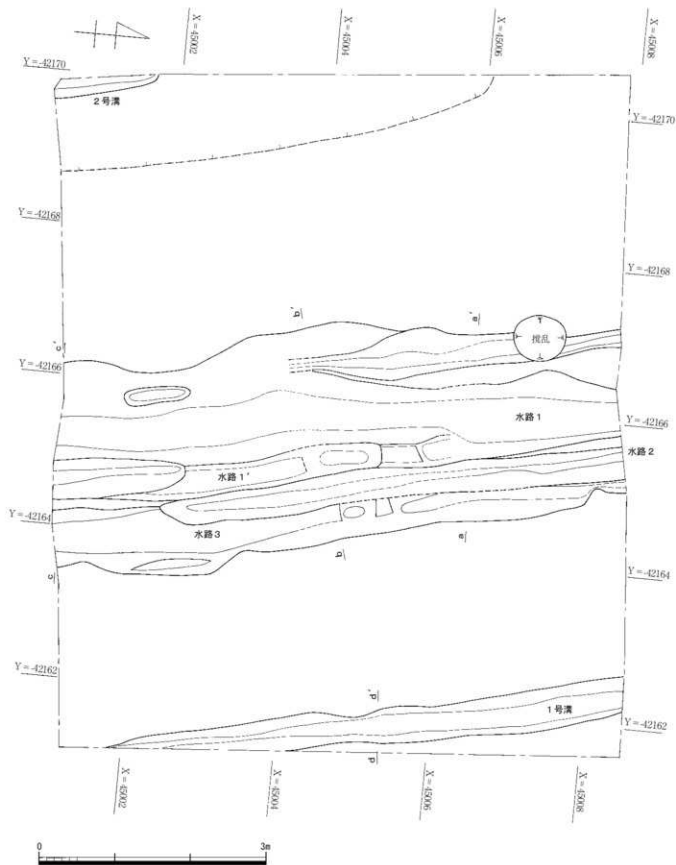
第23図 出土土製品実測図 (S=1/4)



第24図 出土石器・石製品実測図 (S=1/4)

【小結】

今回の調査によって、横隈における近世集落の一端がうかがえる内容となった。過去の調査においては、確実に近世に比定される遺構はほとんど確認できていない。今回検出された主な遺構は井戸と土塀であり、当時の集落の様相についてうかがい知ることはできないが、出土遺物をもとに肥前陶磁器の出土量が少なく、在地生産と考えられる土師器や瓦器の出土量が多い点が特徴として挙げられる。主な出土遺物の時期は、一部17世紀前半代を含むものの、17世紀後半以降のものが大半を占めている。延宝6(1678)年、松崎宿が設置され、松崎往環の開設による横隈宿が廃止された前後の様相を示す材料となりうる好資料である。



第25図 小郡大原町遺跡 遺構配置図 (S=1/50)

(3) 小郡大原町遺跡

【調査の概要】

小郡大原町遺跡は、秋光川東岸の沖積台地の縁辺部に位置しており、遺跡の北東から北西に向けて小規模な谷が入り込んでいる。遺跡の北西及び東西両側は、近世以降に整備された溜め池やその埋立地であり、南側にはなだらかな丘陵が延びる。当遺跡は今調査が1次調査となる。

今回の調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の北東部に位置する。建物建設部分のみの調査であるため、東西9.2m、南北7.5mの非常に狭小な範囲である。遺構検出面の標高は21.2m前後、現地表から約0.5m下る高さで確認している。但し調査区北西から南西にかけて、ゆるやかに湾曲する地形変換ラインがあり、これ以西は西に向かって落ち込んでいく。出土遺構は切り合った溝4条と単独の溝2条のみであり、前述の4条は水路と想定される。確認された遺構・遺物は極めて少量であった。

【遺構と遺物】

1. 溝

1号溝 (第25・26図・図版11)

調査区東端に位置し、南北方向に流れる。検出幅50cm、底面幅25cm、深さ22～28cmを測り、断面はU字形を呈する。遺構の底面は南側へ向かって傾斜する。

遺物の出土は認められない。

2号溝 (第25・26図・図版11)

調査区南西隅で一部のみ検出しており、上部は大幅に削平されている。地形変換ラインと並走するように南北方向に流れる。遺構の底面は南側へ向かって傾斜する。規模・断面形態は不明だが、底面の標高が1号溝と近く、走行する向きもほぼ同じであることから、一連の遺構を構成する可能性も考えられる。

遺物の出土は皆無であった。

2. 水路

水路1 (第25・26図・図版11)

調査区の中央を南北方向に流れ、両端は調査区外へ延長する。東岸は水路2を切り、西岸は水路4に切られる。検出幅は65～100cmと位置によって差が大きいが、底面幅は40～50cmとほぼ一定である。断面は逆台形を呈し、埋土からは水流に伴う堆積が確認できる。遺構の底面は南側に向かって傾斜している。

また東岸に沿って、同一の水路の掘り直しと見られる溝を確認した（以下水路1'と表記）。水路1'の平面プランは調査区南端から約3分の2のみ検出可能であった。検出幅は45cm、底面幅20cm前後、断面形態は位置によって異なるが、U字形～逆台形を呈する。

遺物は全く出土していない。

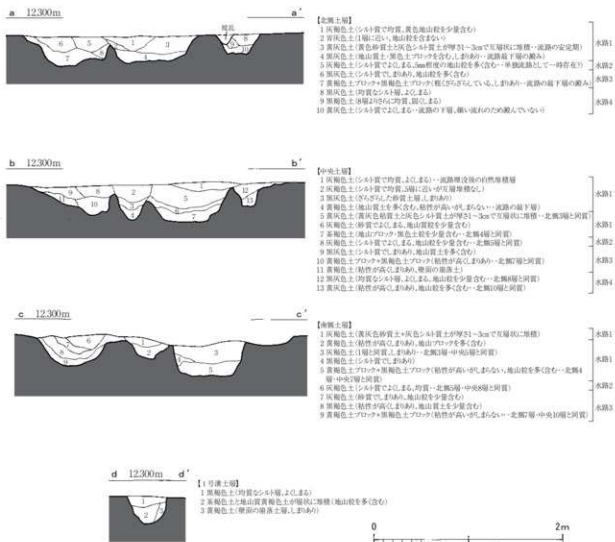
水路2 (第25・26図・図版11)

水路1の東岸を並走する細いもので、南端は調査区内で立ち上がりを確認している。水路1及び1'に切れ、東岸は水路3を切る。検出幅40cm、底面幅10～20cm、断面は逆台形を呈し、底面は南側に向かって傾斜する。埋土は単層で他の水路と比較すると浅く、規模も小さい。短期間一時的に存在した水路と考えられる。

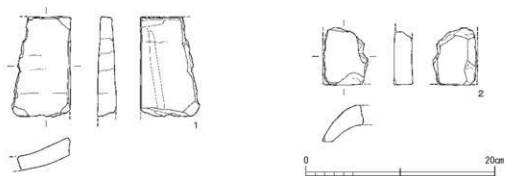
遺物の出土は見られない。

水路3 (第25・26図・図版11)

水路2の東岸を並走し、両端は調査区外へ延長する。水路1及び1'、水路2に切られる。検出幅75～90cm、底面幅50cmを測り、断面は不整な逆台形を呈する。規模は水路1と類似しており、他の水路と比較して底面の凹凸が激しい。埋土の状況からは常時水が流れ、部分的に礫みのあった状況が想定される。遺構の底面は全体的に見ると南側へ向かって傾斜しているが、中央部が一段深く下がる。



第26図 水路・溝土層断面図 (S=1/40)



第27図 3号水路出土遺物 (S=1/4)

出土遺物（第27図・図版12）

燻焼の瓦片2点が出土している。1は平瓦。粘土帯積み上げて製作されており、上面は接合部を板状工具で、下面は指ナデで消した痕跡が見られる。2は丸瓦で、残存している部分は全面板状工具でナデ調整を施している。なお、今回の調査で出土した遺物はこの2点のみであった。

水路4（第25・26図・図版11）

水路1の西岸を並走し、これを切る。南半部の平面プランは検出できていないが、水路1の西岸傾斜部で確認している浅い溝状の掘り込みが、水路4の底面の可能性がある。南壁面の土層断面には水路4が認められないため、調査区内で立ち上がって終息すると考えられる。検出幅 25～60cm、底面幅 10～20cmを測り、断面は逆台形を呈する。

遺物の出土は認められない。

【小結】

小郡大原町遺跡の周辺は溜め池やその埋立地が多く、これまで本格的な発掘調査が行われていない。この地域は「大保原」と呼ばれ、中世戦記文学『太平記』に「菊池合戦ノ事」として記された「大保原（大原合戦）」の舞台となったことで知られている。しかしその実態は、背振山系から延びる台地上に広がる原野で、日常生活に使用する草木の採集が行われる程度の農業に不向きな瘦地であった。

この状況は近世にいたるまで変わらず、当遺跡が所在する小郡村では長く稲作農業に苦心したようである。肥前国対馬藩田代領（現・佐賀県鳥栖市、基山町）を南北に貫流する秋光川の水利権をめぐる、田代領と筑後領の村々が争議を起こした記録が残されている（小郡市史編集委員会『豆田井手水論記録』）。秋光川からは、豆田井手の堰を基点として寺福童の山添池・柿添池へいたる農業用水路が伸びており、これは小郡村の西寄りを通断している。この基幹水路から田畑へ水を供給するための水路も整備されていたはずであり、当遺跡で確認された水路はその一部を構成していた可能性が考えられる。

今回の調査で確認された水路は、水路3→水路2→水路1→水路1'の順で推移していたことがわかる。水路4は水路1に先行するが、その他のものとの先後関係は不明である。出土遺物が極めて少ないためそれぞれの時期決定は困難であるが、埋土の状況に大きな差異はないことから、いずれも近世代の比較的近い時期に機能していた遺構であると考えられる。各水路の調査区東西両端で検出した1・2号溝については、走行する方向から水路と同時期の遺構と推定される。

近世の小郡については、薩摩街道の宿場町である松崎宿が著名であるが、その周辺には久留米藩の経営を支えた数多くの農村が存在していた。近年は近世遺跡の発掘調査事例も増加しつつあるものの、農村集落の生活の実態を解明できるほどの資料は蓄積されていないのが現状である。今後の発掘調査の成果に期待されるものは大きい。

第1表 小坂井屋敷遺跡4 遺物観察表

注量=□:口徑、高:器高、底:底径、径:底径
 器種=土:土師器、須:須恵器、青:青磁、白:白磁、瓦:瓦質土器、磁:磁器、陶:陶器

探検 番号	図版 番号	出土遺構	器種	法量 cm・g (埋元値)	色調	胎土	構成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
第1図		SC1 貼床面	溝・坪・塞	残存高:3.1	外:反黄褐色~ にぶい緑色 内:反黄褐色		粗良 微砂粒を含む	良好	天・外:回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	口~胴 小片	2
第2図		SC1 貼床面	土・塞	口(11.2) 残存高:5.8			1~3mmの砂粒を含む	良好	口・内:ヨコナデ 体・外:ハケム 体・内:ヘラケズリ	口~胴 小片	1
第3図	6	SC1 貼床下	板石	長:11.0 幅:5.95 厚:7.25 重:453.0						流紋岩	イ1
第4図	6	SC2 カマド	土・塞 (カマド 支脚)	高:14.7 高:14.1	外:にぶい黄褐色~ 緑灰色 内:反黄褐色		微粒~5mmの砂粒 を含む	良好	天・外:ハケム後ナデ 体・外:ハケム 体~底・内:ヘラケズリ 底・外:捺サエ 底・内:ヨコナデ	ほぼ完形 外面にス付着	1
第5図	6	SC2 カマド周辺	土・塞	口:14.5 高:14.1	にぶい黄褐色		微砂粒~2mmの砂 粒を含む	良好	口・内:ヨコナデ、外面捺 サエ 体・外:ハケム、上位はハケム後 ヨコナデ 体~底・内:ヘラケズリ 底・外:ナデ	約3/4割 外面にス付着	2
第6図		SC2 カマド内	土・塞	口:22.0 残存高:18.5	外:にぶい褐色~ 黄褐色 内:にぶい黄褐色		微粒~7mmの大小 砂粒を含む	良好	口・内:ヨコナデ、外面捺 サエ 体・外:ハケム、下位はハケム後 ナデ 体・内:ヘラケズリ	口~胴 小片 外面にス付着 同一器体	3
第7図				残存高:5.75					底・外:ナデ 底・内:ヘラケズリ	底部小片	3
第8図		SC2 貼床面	土・坪・塞	残存高:3.6	褐色		微砂粒を含む	良好	口・内:ヨコナデ 他はナデ 磨滅のため調整不明	口~体 小片	6
第9図		SC3 貼床中	溝・坪・塞	残存高:3.8	にぶい緑色		微粒~1mmの砂粒 を含む	良好	天・外:回転ヘラケズリ 天・内:回転ナデ後ナデ 他は回転ナデ	小片 外面にヘラ記号 磨滅跡	6
第10図	6	SC3 埋土中	溝・塞	口(11.2) 高:4.5	反ナリブ色		微砂粒を含む	良好	天・外:回転ヘラケズリ後半 手ヘラケズリ、天井部はヘラ切り 未調整 天・内:回転ナデ後ナデ 他は回転ナデ	約1/4割 同一2器体	8
第11図	6	SC3 貼床中	溝・坪・塞	口(11.7) 高:3.8	灰色		1mm以下の微砂粒 を含む	良好	天・外:回転ヘラケズリ 天・内:回転ナデ後ナデ 他は回転ナデ	約1/4割 埋土中と接合	7
第12図		SC3 貼床中	溝・坪・塞	残存高:3.3			微砂粒を主に含み、 1~3mmの砂粒も 少量含む	良好	底・外:回転ヘラケズリ 底・内:回転ナデ後ナデ 他は回転ナデ	口~体 小片 底部外面にヘラ記号	9
第13図	6	SC3 埋土中	溝・塞	残存高:4.3	外:反黄褐色 内:淡黄褐色		微粒~4mm以下の 砂粒を含む	良好	内~外:回転ナデ 底部外:回転工具ナデ 底部内:回転ナデ後ナデ	坏部1/4割 内P7・SK3と接合 同一2器体	11
第14図		SC2 埋土中	溝・塞	口(12.1) 残存高:6.6	灰色		微砂粒~2mm以下 の砂粒を含む	良好	回転ナデ	口~体 小片	5
第15図		SC3 埋土中	土・塞	残存高:7.2	外:にぶい黄褐色 内:にぶい褐色 内:にぶい黄褐色		1mm以下の微砂粒 を含む	良好	口・内:ヨコナデ 体・外:ハケム 体・内:上位一部ナデ、ヘラケ ズリ	口~体 小片 覆土と接合	3
第16図	6	SC3 No.1	土・塞	口(14.5) 高:15.8	外:にぶい褐色~ 黄褐色 内:にぶい黄褐色		1mm以下の微砂粒 を含む	良好	口・内:ヨコナデ 体・外:ハケム後一部ミガキ 体~底・内:上位ヨコナデ後 ヘラケズリ、ヘラケズリ 底・外:ハケム後一部ナデ	約1/3 外面にス付着 底部内面に裏面 底土及び住居内P3と 接合	1
第17図		SK3	土・坪・塞	口:11.1 高:5.0	外:褐色~ にぶい黄褐色 内:にぶい褐色		1mm以下の砂粒を 多く含む	良好	天・外:ヨコナデ、口縁部 磨滅 底・外:手持ちヘラケズリ 底・内:ナデ	1/2割 外面に濃い裏面	3
第18図		SK3	土・塞	残存高:4.0	外:赤褐色 内:黒褐色		微粒~3mmの砂粒 を含む	良好	口:磨滅のため調整不明 体・外:ハケム 体・内:ヘラケズリ、工具痕	口小片	1
第19図		SK5 副組 径150	土・高坪	残存高:2.6	褐色		1mm以下の微砂粒 を含む	良好	調整・外:ナデか?磨滅磨 副組・内:工具ナデまたはハケ ム	約1/4割 割れ口部分に穿孔か?	2
第20図		SK5	土・塞	残存高:5.5	外:反黄褐色~ 黄褐色 内:にぶい赤褐色		微粒~3mmの砂粒 を含む	良好	底・外:工具ナデまたはハケ ム ナデ 底・内:ヘラケズリ	底1/4 外面にス付着	1
第21図		P5	溝・高坪	残存高:2.5	外:反褐色 内:暗反黄褐色		微砂粒を主に含み、 2mmの砂粒も含む	良好	回転ナデ、外面工具痕	口~体 小片 外面にヘラ記号?	1
第22図		P18	土・塞	残存高:5.1	にぶい黄褐色		微粒~2mmの砂粒 を含む	良好	口・外:ハケム後ヨコナデ、磨 滅 口・内:ヨコナデ 体・外:ハケム 体・内:ヘラケズリ	口小片	1

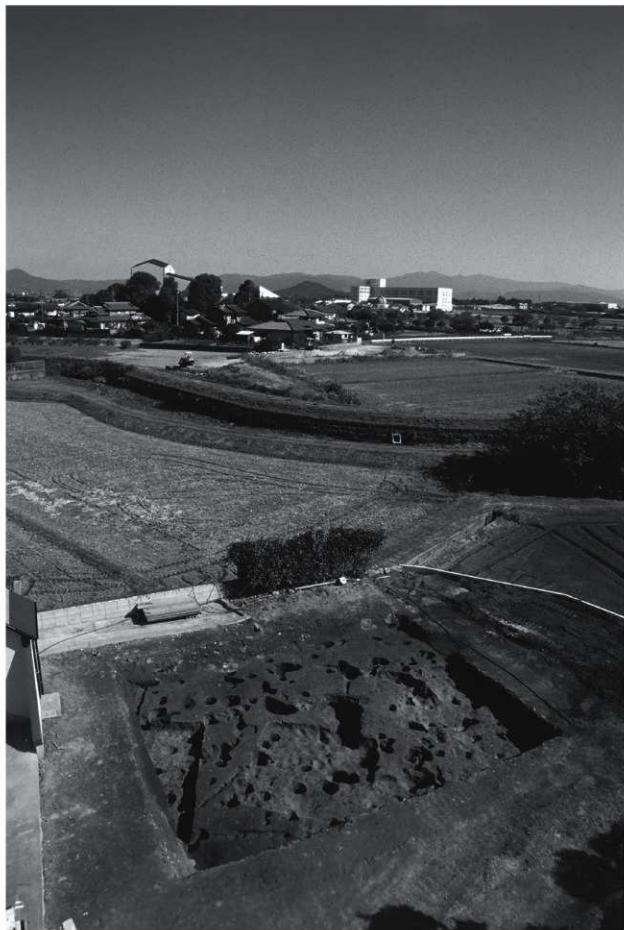
第2表 横限上内畑遺跡7 遺物観察表

探検 番号	図面 番号	出土遺構	群種	法量 cm・# (深×幅)	色調	胎土	模様	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号
第16図	1	1号井戸 上層	土・皿	底 (4.0) 残存高: 1.4	外・にぶい黄褐色 内・にぶい褐色	微砂粒をわずかに含む	良好	底・外・回転糸切り 他はヨコナデ	底 3/4 強		1
第16図	2	1号井戸	土・皿	底 (5.0) 残存高: 1.9	にぶい黄褐色	微砂粒を含む	良好	底・外・回転糸切り 底・内・ナデか? 他はヨコナデ	ほぼ完全形		6
第16図	3	1号井戸	土・皿	残存高: 1.1	にぶい黄褐色	微砂粒を含む	良好	底・外・回転糸切り 底・内・ナデか? 他はヨコナデ	底 1/4 弱		8
第16図	4	1号井戸	土・鉢	残存高: 5.35	にぶい褐色～ 黒褐色	微砂粒～4mmの砂 粒を含む	良好	口・内外・ヨコナデ 体・外・ナデ、指オサエ 体・内・ナデ	口小片		11
第16図	5	1号井戸	瓦・鉢	残存高: 5.45	外・にぶい褐色～ にぶい黄褐色 内・にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒・微 砂粒を含む	やや 不良	口・内外・ヨコナデ 体・外・ハケム後ナデ、指オサエ 体・内・ハケム後ヨコナデ 底・内外・ナデ	口小片	内面に黒斑 瓦割か?	1
第16図	6	1号井戸	陶・鉢	底 (18.3) 残存高: 5.3	黄褐色	1mm以下の微砂粒 を多く含む	良好	底・外・ハケム 体・底・内・ナデ、スリム 底・外・ナデ	底 1/2 弱		2
第16図	7	1号井戸	陶・鉢	底 (13.1) 残存高: 3.9	外・黄褐色～ 褐色 内・にぶい褐色	1mm以下の微砂粒 を含む	不良	底・外・ハケム 体・底・内・ナデ、スリム 底・外・ナデ	底 1/4 強		3
第16図	8	1号井戸	土・壺	口 (14.0) 残存高: 6.2	外 褐色 内 にぶい褐色 ～灰青色	1mm以下の微砂粒 を多く含む	良好	口・ 甕裏のため調整不明 口・内・ヨコナデ 体・内・ナデ、指オサエ、工具痕	口の1/3	刃割の可能性有り	13
第16図	9	1号井戸	瓦・壺	口 (14.2) 残存高: 16.2	外・黄褐色～ 褐色 内・灰青色	1mm以下の砂粒を 含む	良好	口・外・ヨコナデ、ハケム後ヨコ ナデ 口・内・工具ナデ 体・外・ハケム後ナデ、ヨコナデ 体・内・指オサエ、ナデ後ハケム 下半はハケム	口～胴 約1/3	外面にス入付磨 摩部に洗痕・竹曹文有 り	12
第16図	10	2号井戸	土・皿	残存高: 1.45	にぶい黄褐色	微砂粒を含む	良好	底・外・ナデ 底・外・回転糸切り 底・内・ヨコナデ	底約1/4		4
第16図	11	2号井戸	土・碗	残存高 2.8	にぶい黄褐色	微砂粒～2mmの砂 粒を含む	良好	底・外・ナデ、指オサエ	底約1/2	外面に粘土接合痕	3
第16図	12	2号井戸	土・鉢	残存高: 4.1	外 褐色 内 にぶい褐色 ～黒褐色	1mm以下の微砂粒を 多く含む	良好	口・ヨコナデ 体・外・ナデ? 指オサエ 体・内・ハケム後一部ナデ	口小片	外面にス入付磨 内面に灰化物付着	5
第16図	13	2号井戸	土・鉢	残存高: 4.15	にぶい黄褐色	1～6mmの砂粒を多 く含む	良好	口・内外・ヨコナデ 底・外・ナデ後ハケム 体・外・ナデ 底・外・回転糸切り 底・内・ヨコナデ	口小片		1
第16図	14	3号井戸	土・皿	底 4.7 残存高: 0.9	にぶい黄褐色	微砂粒を含む	良好	底・外・回転糸切り 底・内・ヨコナデ	底完全形		1
第16図	15	3号井戸	土・皿	残存高: 1.15	外・にぶい黄褐色 内・褐色	微砂粒を含む	やや 不良	底・外・ヨコナデ 底・外・回転糸切り 底・内・ヨコナデ	底約1/2		2
第16図	16	3号井戸	磁・碗	高台径: 5.95 残存高: 1.9	緑・オリーブ灰色 胎土 灰白色 高台部 褐色	密	良好	体・外・施釉 体・底・内 施釉 底・外 無釉	底 1/2 強		8
第16図	17	3号井戸	土・鉢	残存高: 5.05	にぶい褐色	2mm以下の砂粒を含 む	良好	口・ヨコナデ 体・外・ナデ、指オサエ 体・内・ハケム	口小片		5
第19図	1	1号土坑	溝・壺	残存高: 1.6	外 灰色 内 黄褐色	積炭 微砂粒をわずかに含む	良好	底・外 甕縁へラ切り後ナデ 他は回転ナデ	底小片		4
第19図	2	1号土坑	土・皿	底 (4.4) 残存高: 0.9	淡黄色	微砂粒を含む	良好	底・外・回転糸切り 底・内・ナデ 他はヨコナデ	底 1/2 弱		2
第19図	3	1号土坑	瓦・鉢	残存高: 5.4	にぶい褐色～ 黄褐色	1mm以下の微砂粒を 含む	やや 不良	口・ヨコナデか? 胎土 黒いナデか? 外 甕裏のため調整不明 内 ハケム	口小片	傾きのあまい瓦割 ほぼ正鉢	1
第19図	4	1号土坑	陶・壺	残存高: 4.8	外・緑 黒褐色 内・緑 灰褐色 胎土 灰褐色	積炭	良好	内外・口・ロク水引き、施釉	口小片		9
第19図	5	1号土坑	陶・磁鉢	残存高: 5.05	外・緑・暗赤褐色 内・黒褐色 胎土 緑灰色	1mm以下の砂粒を含 む	良好	底・外・口・ロク水引、施釉 体・底・内 スリム 底・外 不明、一部ヘラケズか?	底小片		11
第19図	6	1号土坑	陶・磁鉢	残存高: 4.15	外 褐色 内 灰褐色 胎土 灰褐色	1～2mmの砂粒をわ ずかに含む	良好	底・外・口・ロク水引 体・底・内 スリム 底・外 回転糸切り、一部ナデか?	底小片		10
第19図	7	1号土坑	瓦・鉢	残存高: 9.7	黄灰色～黒褐色	微砂粒を主に含み、 2mm程の砂粒もわ ずかに含む	良好	口・外・ハケム、一部ハケム後 ヨコナデ 口・内・ハケム、一部ナデ、工 具によるヘラケズ、ヨコナデ 他はハケム	口小片	透かしが入っていた 可能性	5
第19図	8	1号土坑	陶・瓶	高台径: (12.2) 残存高: 12.0	外・緑 暗赤褐色 内 灰褐色 胎土 灰褐色	積炭 微砂粒を含む	良好	体・内外・口・ロク水引 底・外・ケズり出し高台 外黒施釉	底 1/2 弱		12
第19図	9	1号土坑	磁・蓋	口 (8.2) 高 2.4 高台径 3.2	緑 灰白色 胎土 灰白色	微砂粒を多く含む	良好	施釉	底形	蓋付	13
第21図	1	1号ピット	磁・鉢	口 (23.8) 高 6.3 高台径: 11.8	胎土 灰白色 緑・青みがかった 白色	密 微砂粒を多く含む	良好	施釉	口～底 小片	絞目四筋高台 高台内筋「黒」	2

検出 番号	図面 番号	出土遺構	器種	法量 cm ³ ・g (復元量)	色調	胎土	構成	成形・調整方法	残存率	備考	実測 番号	
第21図 2	9	1号ピット	陶・瓶	最大径： 18.1 残存高：7.8	外 灰褐色～赤 褐色 内 赤褐色 胎土：赤褐色		密	内外：ロウロ水引 底・外：回転糸切り 部分的に捲輪	底完整	外面にスチ付着	1	
第21図 3	9	1号ピット	磁・碗	高台径：4.1 残存高：2.8	胎土：にふい黄 褐色 透黄色		密	底・外：ケズリ出し高台 捲輪	底完整		3	
第22図 1	9	遺構 横出時	磁・碗	残存高：3.2	胎土：灰白色 釉：明オリーブ灰 色		密 微砂粒を含む	良好 捲輪	底小片	高台部欠損	1	
第22図 2	9	遺構 横出時	磁・皿	口：(11.4) 高：2.4 高台径：(6.8)	胎土：灰白色 釉：灰白色		密	良好 捲輪		口～底 約1/4 型紙削り	2	
第23図 1	9	1号土坑	土・ 箱式燧石	長：10.3 幅：6.6 厚：4.3 重：155.0						脚：ナデ、指環状痕	脚～体小片 内面焼熱痕ナシ	ド1
第24図 1	10	1号土坑	板石	長：12.1 幅：6.35 厚：3.45 重：310.0					小片	波紋面	イ1	
第24図 2	10	1号井戸	石口	長：10.2 幅：6.7 厚：4.2 重：97.5					小片	(溶結)凝灰岩 炭化物多量に付着	イ1	
第24図 3	10	3号井戸	不明石製品	長：10.0 幅：10.1 厚：5.0 重：699.0					小片	安山岩	イ1	

第3表 小郡大原町遺跡 遺物観察表

検出 番号	図面 番号	出土遺構	器種	器種 印変埋規	法量 cm ³ ・g (復元量)	色調	構成	胎土	成形・調整方法	実測 番号
第27図 1	12	SD3	瓦	平瓦	長 (10.5) 幅 (6.2) 厚 1.8	外 黒灰色 胎土：灰色	良好	1～3mmの砂粒を含む	板状工具ナデ	カ1
第27図 2	12	SD3	瓦	丸瓦	長 (6.0) 幅 (4.6) 厚 2.0	外 黒灰色 胎土：灰色	良好	1～3mmの砂粒を含む	板状工具ナデ	カ2

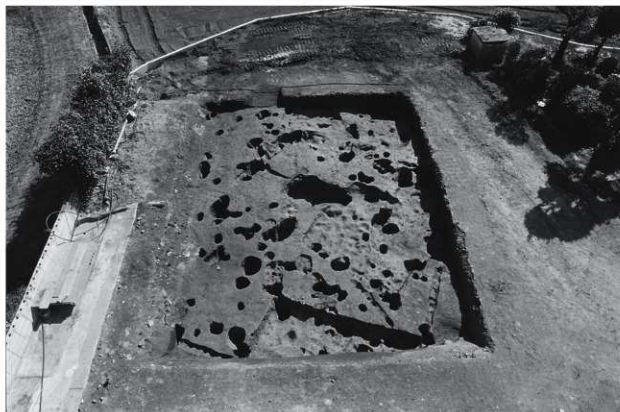


小坂井屋敷遺跡4上空から大板井を臨む

図版2



①小板井屋敷遺跡4 全景（南西上空から）



②小板井屋敷遺跡4 全景（北西上空から）



① 1号住居 貼床検出状況 (西から)



② 1号住居 完掘状況 (西から)



③ 1号住居 土層断面 (南東から)



④ 2号住居 貼床検出状況 (南西から)



⑤ 2号住居カマド遺物出土状況 (南西から)



⑥ 2号住居 完掘状況 (南西から)

図版4



① 3号住居 土層断面（北西から）



② 3号住居 貼床検出状況（東から）



③ 3号住居 完掘状況（東から）



④ 1号土坑 完掘状況（南東から）



⑤ 2号土坑 土層断面（北西から）



⑥ 2号土坑 完掘状況（北西から）



⑦ 3号土坑 土層断面（北東から）



⑧ 3号土坑 完掘状況（南西から）



① 1号溝 完掘状況 (北から)



② 4号土坑 土層断面 (北東から)



③ 4号土坑 完掘状況 (北東から)



④ 5号土坑 土層断面 (西から)



⑤ 5号土坑 完掘状況 (西から)

図版6



小坂井屋敷遺跡4 出土遺物



①横限上内畑遺跡7全景（西から）



②1号井戸完掘状況
（東から）



③2号井戸完掘状況
（北から）



④3号井戸完掘状況
（西から）



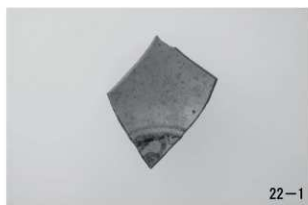
⑤1号土坑土層（西から）



⑥1号ビット遺物出土状況（南から）

图版8





図版10





①小郡大原町遺跡 全景 (南西上空から)



②溝状遺構 北側土層断面 (北から)



③溝状遺構 中央土層断面 (北から)



④溝状遺構 南側土層断面 (北から)



⑤1号溝 土層断面 (北から)

図版12



報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書5							
副書名	平成23・24年度 国庫補助事業 市内遺跡調査報告書							
巻次								
シリーズ名	小都市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第269集							
編著者名	上田 恵・龍 孝明							
編集機関	小都市教育委員会							
所在位置	小都市教育委員会 〒838-0198 福岡県小都市小郡255-1 ℡0942-72-2111							
発行年月日	平成25年3月22日							
保管場所	[遺物]・[図版]・[写真] 小都市埋蔵文化財調査センター 〒838-0106 福岡県小都市三沢5147-3 ℡0942-75-7555							
所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こいたい やしき 小坂井屋敷 遺跡4	福岡県小都市 小坂井屋敷	40216		33° 23′ 28″	130° 33′ 47″	2011.10.18 ～10.28	103.61 m ²	個人 住宅 建設
よこてまかいりうほた 横隈上内畑 遺跡7	福岡県小都市 横隈字上内畑	40216		33° 25′ 35″	130° 34′ 06″	2011.9.28 ～10.26	68.06 m ²	個人 住宅 建設
おておおはら 小郡大原町 遺跡	福岡県小都市 小郡字大原町	40216		33° 24′ 06″	130° 32′ 56″	2012.2.23 ～3.12	69.0 m ²	個人 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小坂井屋敷 遺跡4	集落	古墳 奈良	住居・土坑・ 溝	土師器・ 須恵器・ 石器	古墳時代後期の集落の一部。 カマドを有する住居が検出された。			
横隈上内畑 遺跡7	集落	近世	井戸・土壇・ 溝	土師器・ 瓦器・ 陶磁器・ 石製品	17世紀後半から18世紀代にかけての集 落の一部。 素掘り井戸と廃棄土壇・ピットが検出 された。			
小郡大原町 遺跡	集落	中世 近世	溝・水路	瓦	近世の溝2条、水路4条が検出された。			

埋蔵文化財調査報告書 5

—平成 23・24 年度 国庫補助事業 市内遺跡調査報告書—

小郡市文化財調査報告書 第 269 集

平成 25 年 3 月 22 日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1

出版 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15

